



1960年代にレイ・チャールズのために製作されたユニークな点字腕時計。その歴史にまつわる伝説的ミュージシャンの魅力溢れる思い出はまた、父と息子の感動的な物語でもある。

文 ジョン・リアドン 翻訳 小金井 良夫

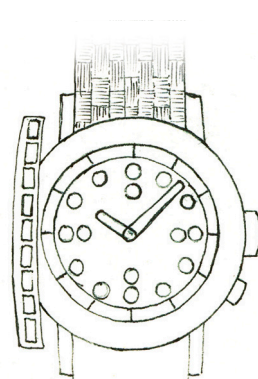
最近私は、パテックフィリップUSAの元会長であるウェルナー・ソンと昼食を共にしたことがあった。彼は1960年代に、レイ・チャールズのためのプラチナ製点字腕時計のデザインを手伝ったと教えてくれた。最初私はこれを話半分に聞いていたが、私にはレイ・チャールズの家族につながりのある友人がおり、レイ・チャールズ・ジュニアと話す機会を得た結果、それが本当であることを知った。

レイ・チャールズ・ロビンソンは、ジャズ、ブルース、R & B、ゴスペルソングをソウルミュージックに融合させたパイオニアであった。タイム・マガジンは書いている。「彼の心の底から絞

り出されるしゃがれ声は、絶望した男の悲痛さに満ちていた」。ジョージア州オールバニーで生まれたチャールズは、3歳でピアノを学んだ。緑内障により4〜5歳の頃から視力を失い始めた。7歳で全盲となり、母親は彼を寄宿学校に入れて点字を学ばせた。15歳で卒業後、シアトルに行き、自身のバンドをつくり、クラブで働いた。徐々に彼の名声は広まった。60年代には、『ジョージア・オン・マイ・マインド』や『ヒット・ザ・ロード・ジャック』などのリリースにより賞賛を博し、多数のグラミー賞を受賞した。

1963年、名声の頂点にいた彼は、ユニークな時計を贈られた。贈り主は、彼のプロデューサーであり、ジャズレコード会社ヴァーヴを創業した時計愛好家のノーマン・グランツといわれる。レイ・ジュニアは、「彼らはとても親密でした。2人のパートナーシップの思い出として、またとない贈物でした」と語る。

パテックフィリップは、それまで点字時計を製作したことはなかった。特別製作されたこの3482モデルには、強力なゼンマイを備えた懐中時計のムーブメントが搭載された。点字時計は、指針に触れるため、それに耐えられるパワが必要だったのである。点字を判読しやすくするため、文字盤は大きく、直径は37ミリであった。チャールズは、この時計を常時着用していた。オリジナルの革バンドは、後にプラチナ・ブレスレットに交換された。多くのミュージシャン同様、演奏中汗をかいたからである。「当時は誰もが金時計を着けていたので、この



スリムなプラチナ・ケース、着用者が時刻を指で触れて知ることができるダイヤ付の丸い文字盤、40個のブリリアントカット・ダイヤモンドがセッティングされたヒンジ付カバー。このレイ・チャールズのための腕時計のデザインは魅力的である。時計は紛失したが、パテックフィリップ資料室に保存されたこれらの図により、その外見を知ることができる。

銀色の時計は印象的でした。父の茶色の肌美しく映えました。父は、この時計を除けば、ダイヤモンドのカフスボタンの他にジュエリーは持っていないでました。当時の様子を鮮やかに覚えています。父は若く、わずか33歳でした。スーツは、細い襟のついた、カスタムメイドのシルバースャークスキン製でした。スタイリッシュな父のオーデコロン、父の顔、そして手首に着けたパテックフィリップを思い出します。もちろん父は時計を見ることができず、8歳の子供だった私には、その完璧な美しさを父に説明することはできませんでした。

視力を失う前からチャールズは機械が大好きであった。レイ・ジュニアは回想する。「父親にとつて時刻は重要でした。盲目なので、昼夜が分からなかったからです。少なくとも1時間に1回は、軽く時計を叩いてカバーを開き、文字盤の上を優しく指でなぞり、時計を耳に当てて、リズムカルな音を聞いて微笑みました。その音だけで父は幸せだったのです」。

今日この時計は紛失してしまいましたが、いつか見つけ出す希望をレイ・ジュニアは捨てていない。見つけ出したら、彼は何をやるだろうか？ レイ・ジュニアは微笑む。「カバーを叩き、開いたら、文字盤の上を指でなぞり、耳に当てて、チクタク音を聞くでしょう」。暫しの無言の後、彼は言う。「すべては昨日のことのようです」。

「パテックフィリップマガジン・エクストラ」(patek.com/owners)にて、この記事の特別関連コンテンツをご覧ください。